

中級前コースへのリレー式物語創作活動の導入 Introducing Relay-style Story Telling Activities into a Pre-intermediate Japanese Course

水戸淳子, 香港大学
Atsuko Mito, The University of Hong Kong

1. はじめに

筆者はこれまで海外の大学において、中級前の学習者を対象にした授業の中で俳句や川柳、詩、物語の創作といった創作活動を取り入れてきているが、本稿ではリレー式で物語を創作するという活動について紹介、報告し、見えてきた課題や今後の発展の方向について、活動後に行った学習者へのインタビューの結果も踏まえて、検討、考察する。

1.1 リレー式物語創作活動

この活動は「リレー式ストーリー・ライティング」、「リレー創作」、「リレー作文」、「リレー物語（作文）」、「リレー小説」、「story telling relay」、「relay-style creative writing」といった様々な名称で、国内外、言語の別を問わず行われている。

日本語教育では近年、田辺・野口・大須賀・岡田（2017）において、様々なレベルにおいての実践活動が報告されており、そこではリレー式ストーリー・ライティングを「複数の人間が次々と続きを書き足しながら、一つの物語を完成させる協働創作活動である」としている。

また、国語教育の分野では、小学校から高校にわたって様々な実践活動が報告されており、大谷（2018）では、高校一年次の必修「国語総合」の授業において、一コマ漫画を題材にした起承転結の四段落構成のショート・ストーリーをリレー創作で行ったという実践活動が報告されている。

「リレー式」という言葉が示すように、この活動の大きな特徴の一つは「書き手が交替する」ところにあり、メンバー一人一人が責任を持って与えられた自分のパートを全うし、次につなげる（最終執筆者であれば、話を終わりにする）という役割を果たす形式になっている点である。

様々な形での活動が考えられ、グループの人数や、一人当たりの書く長さや時間、題材の選び方や設定、それらの提示の仕方、導入の仕方などをどうするかによっても大きく変わり、各現場に適した形での工夫が可能である。

1.2 「リレー式」の利点、面白さ

書き手が交替する形での日本語表現として古くからあるのは連歌であるが、こういった書き手が替わる表現活動の面白さとしてまず挙げられるのが自分の順番が回ってくるまでの他の人の予期できない発想や展開、変化を受容し、理解した上で次につなげていかなければならないという独特のスリル感である。

また、連歌は「座の文芸」と呼ばれているように、そこに集う人間達による共同での創作活動であり、その場において他のメンバーに見守られ期待される中で、与えられた文脈の中で即興的に自らの表現を繰り出さなければならず、それには

集中力や瞬発力を必要とする。そして、お互いが繰り出した表現や、その場の全員で作ら上げた作品を一緒に鑑賞することができる。

こういった形式の表現活動は、その場にいる人間同士が相互に影響を与えながらも、個性を完全に埋没させたり殺したりすることなく他の人とつながっていくことができるものであり、お互いに個性を発揮し受容しながら、それらを織り込んで作品を創作していく過程には、一人で全部を書き上げる創作とは異なる独特の充実感がある。

このような情意面での特色や利点、効果については、これまで田辺・野口・大須賀・岡田（2018）がリレー式ライティングがメンバー間の良好な人間関係の構築に与える効果という点について取り上げており、「リレー式ライティングにおける協働作業によって、良好な人間関係形成は、（母国語であろうと外国語であろうと）、期待できる」としている。また大谷（2018）は「……自分自身の隠された一面を知り、普段接しているだけではわからなかった友人の別の一面を知ることができる」「クラスの中で、書いたものを発表しあったり作品集を作って読み合ったりということを常時実践していると、学習者どうしの間にお互いを認め合い尊重する雰囲気生まれてくる」と述べており、これらはこのような「書くこと」の授業において得られる副次的な収穫と言ってもよいのではないだろうかと考察している。

また、言語学習面における利点をまとめてみると、まず、この活動は創作活動でありながら同時に読解力が深く求められるという点が挙げられる。自分のパートを書くためには、必然的に前に書かれている内容を理解することが必要であり、特に、ストーリーを自分の頭の中だけでコントロールできない分、より一層、話の一貫性や、話の結束性、文と文のつながりに注意して読み解き、それらに配慮するという意識が働くのではないかと考えられる。

また、このようにクラスメートとともに創作していく過程や、創作後に作品を鑑賞する過程において、ピアからの学びも必然的に生まれていることが想像できる。

2. コースの概要

この活動を取り入れたのは、筆者が香港の大学で担当している"Japanese for effective communication"という初級後半を対象とした選択科目のコースである。このコースは必修コースに付随する形で行われており、必修の文法コースでは『みんなの日本語初級Ⅱ』の36課～50課を学習しているレベルである。このコースの目的はスピーキング、ライティングの様々な形式に慣れ、日本語での自己表現やコミュニケーションの力を高めることであり、授業では俳句や詩、物語の作成といった創作的な活動の他に、意見を述べたり、ディスカッションに参加したりするなどの活動も行っている。

履修者数は当時18名で、全員がJapanese Studies（日本研究）を専攻または副専攻している学生であったが、三分の二以上の学生がダブル・メジャー（二つの主専攻）の学生であり、日本研究の他に中国文学や比較文学、美術、統計学などを専攻していた。また、ほとんどが2年次に属する学生であった。

3. 活動について

今回、二つの違う形式でのリレー式物語創作活動を試みた。一つは、クラス全員で一人一文ずつ追加していく形で、もう一つは、グループで回し書きしていくやり方である。

3.1 クラス全員でのリレー式

『フィンランドメソッド実践ドリル』（2008）より、主人公となる人物の絵を用意し、この人についての物語を一人一文ずつ追加していくという形で行った。違う絵を使って2回この活動を行ったが、一回目は例として教師の筆者からスタートし、名乗りの文（「（主人公の名前）です」）から始め、座席順に一人一文ずつその場で考えて話してもらった。筆者は提示してある絵の横に学習者が作成した文を書き込んでいき、クラス全体で話の流れが掴めるようにした。学習者の発話が聞き取れなかったり、意味が不確かな部分が含まれていたりした場合は、聞き返し、意味を確かめた上で、書き込んでいった。違う絵を使った二回目の活動でも、発話の順番は座席順であったが、前回とは順序が逆になるようにした。この活動の参加者は17名で、一人一回参加する形で一つの物語を完成させた。

一回目よりも二回目の方が学習者が慣れてきたせいか、作成する文章が長くなり、名詞修飾や複文なども見られるようになった。また、一人一文を原則としたが、一文以上である場合もあった。

作品が完成した後、もう一度クラスで最初から最後まで文章を確認し、鑑賞した。

3.2 グループでのリレー式

こちらの活動でも主人公となる人物の絵を『フィンランドメソッド実践テキスト』（2008）より用意し、3～4のグループで円を作り、この人物についての物語を一人一文ずつ回し書きしていってもらった。書き始めは「この人の名前は……」から始めてもらった。また、一人が書く時間に制限は設けず、一文書き終わったら、次の人に回していってもらった。活動時間は全体で15分ほどだったが、5つの内の4つのグループが延べ10回回し書きをしており、残り1つのグループは延べ13回回し書きをしていた。1回につき一文書くというのが原則ではあったが、二文以上書いている学習者もいた。

活動時間が残り5分程度になったところで学習者にそれを伝え、それまでに話を終わりにするように促した。残り時間を全部使わずに早めにストーリーを終わらせたグループもあれば、最後の最後まで書き足し続け、エンディングがうまくまとまらなかったグループもあった。

活動後、全てのグループの作品をクラス全体で確認、鑑賞した。

3.3 創作された作品について

これらの活動の導入時に、教師である筆者から「『絵の主人公についての物語』という設定以外はどうぞ自由に作ってください」と学習者に伝えたこともあって

か、提示した主人公の絵が特別な人物像でもなかったにも関わらず、クラス全員で作った作品（合計2つ）と、グループで作成した作品（合計5つ）のどれもが現実離れたフィクション性が高いものであり、「吸血鬼」「悪魔」「古い城」「宇宙人」「愛人」「スパイ」「自殺」「復讐」「暗殺」といった語彙が登場するような、ファンタジーやサスペンスといったジャンルに属するものであった。

4. まとめと今後の発展の方向性

学習者へのインタビューで聞き取った事も交えて、こういったリレー式の創作活動をデザインする際に考えておくべきだと思われることを以下にまとめておきたい。

① クラス全体でのリレー式

ほとんどの学生がリレー式での創作活動は初めてであったことがインタビューで分かったが、リレー式での創作形式にまず慣れるためにクラス全体でこの活動を一度行ってみるのは有効であると思われる。しかし、クラスの人数にもよるが、個々の学生にとっては待ち時間が長くなってしまおうという短所について考慮する必要がある。

② 題材

筆者は今回登場人物の絵を出発点として創作してもらったが、大谷（2008）では1コマ漫画の絵を出発点としている。絵ではなく、最初や最後の一文／段落を予めこちらから指定したり、またそれらの両方を指定したりするやり方も考えられる。いずれにせよ、大谷（2008）も「初歩の段階では、自由に想像を膨らませやすい素材を選ぶほうが望ましいのではないだろうか」と述べているが、文や絵が示す設定が詳しくすぎたり細かすぎたりすると、想像の幅を狭めてしまう危険性があることに注意して、素材の選択やお題の設定をする必要がある。

③ グループの作り方

メンバーの日本語レベルなどのバランスも考慮すべき点であるが、今回インタビューをした結果から1つのアイデアとして、希望のジャンルごとにグループメンバーを集めるというやり方もあるのではないかと考えている。今回の活動で「吸血鬼」「愛人」「スパイ」などといった特定のジャンルでよく使われる語彙が出てきたが、インタビューで、そういった言葉を漫画やドラマ、アニメから習っていてぜひ使いたいと思ったという学習者がけっこういたことがわかり、また、ストーリーに一貫性を持たせるのが難しかったという声や、ストーリーの方向性について最初に少しみんなで相談したというグループもあったことがわかったため、グループごとに希望のジャンル（例：ハートウォーミング／ファンタジー／ロマンス／サスペンス／ホラーなど）を設定し、その中で自由に作ってもらおうという方法も試してみたいと思っている。

④ 書く時間や長さの制限

筆者の今回の試みは、一文ずつ書き足すというものであったこともあり、一人の書き手が書く時間について制限時間は設けなかったが、段落ごとにじっくり考えて書き込む場合、時間制限を設けずに宿題の形で書いていくという形も考えられる。

また、今回、筆者はグループで1つの作品を作る形にしたが、一人の書き手の制限時間を設定して同時に隣の人に回していくというやり方なら、最終的にグループの人数分の物語が創作されることになり、また学習者は待ち時間が一切ないという利点があるため、筆者は次回こちらの方法を試してみようと考えている。

⑤ 最後をどうするか

インタビューで学習者から、話を最後にまとめるのが大変という声があったが、グループで1つの作品を創作する場合は、最後の段落をメンバー同士で相談し合ってまとめるという方法を採用してもいいかもしれない。

最後に、今後の発展の方向性として、文章の展開表現（接続語）の学習と絡めてこの活動をデザインすることや、また、インタビューで新しい言葉を習ったという声が非常に多かったこと、そして、活動を通して「クラスの皆さんのことを知りました」「みんなの **creativity** はすごい」「メンバーが助けてくれた」という声も聞かれたことから、ピアでの学びやクラスメートとの関係性という点に焦点をおいてこれらの活動を分析してみることも考えている。

参考文献

- 大谷伊都子（2018）「『書くこと』の指導：一コマ漫画を使った創作の試み」
『梅花女子大学文化表現学部紀要』14, 15-22
- 諸葛正弥（2008）『フィンランドメソッド実践テキスト』毎日コミュニケーションズ
- 諸葛正弥（2008）『フィンランドメソッド実践ドリル』毎日コミュニケーションズ
- 田辺和子・野口潔・岡田彩・大須賀茂（2017）「リレー式ストーリー・ライティング」『第23回プリンストン大学日本語教育フォーラム予稿集』59-73
- 田辺和子・野口潔・岡田彩・大須賀茂（2018）「リレー式ストーリー・ライティング 21世紀型日本語作文教育の工夫」AATJ 2018 Annual Spring Conference